

琉球大学医学部長・大学院研究科長 中西浩一 先生



西江先生> この度は、琉球大学医学部長・大学院研究科長ご就任誠におめでとうございます。ご就任にあたっての率直なお気持ちをお聞かせいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

中西先生> ありがとうございます。まず、これまで、支えていただいた多くの皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。このような重責を担うことになり、身が引き締まる思いです。琉球大学に赴任するにあたり、月並みではありますが、しっかりと仕事がしたいという思いがありましたので、それを少しはできたかなという、達成感もありますが、ここがスタート地点であるようにも感じています。綺麗で立派な建物の中で仕事ができ、気持ちが上がります。琉球大学医学部の新たな歴史が始まりましたので、皆様と力を併せて確実に歩んでいきたいと考えています。

私は琉球大学に赴任して9年目になりますが、学部運営では、教務委員会、入試委員会、医学教育分野別対策委員会委員などを務めてきました。赴任3年目からは副病院長を拝命し、初めの4年間は診療・臨床研究担当として、病院機能評価認定などに取り組みました。その後2年間は、医療安全管理責任者を務めました。令和4年度から大学本部研究推進会議研究企画員を拝命していました。また、入職直後から先端医学研究センターの運営に尽力してまいりました。担当しております希少疾患分野を含め、さらなる成果を目指します。また、特定臨床研究のPIを務め推進してまいりました。これらの経験を活かして、着実に医学部の運営をしていきたいと思っています。

西江先生> 中西先生がこれまでに様々なことに対してご尽力されていることを私自身感じているところですが、医学部長・研究科長とし

て、まず取り組みたいと考えていることをお聞かせください。

中西先生> まず取り組みたいことは、琉球大学が人々に選ばれる職場になることに注力したいと思います。そのためには琉球大学の魅力を高める必要があります。一言で「魅力」と言っても単純ではありません。人々が何を魅力と考えるのか、それは人それぞれで違います。幸いなことに、移転によってハード面は立派なものを作っていただきました。病院の施設は、手術室、救急、ICU、NICU など、詳細は他に譲りますが、いずれも大変立派です。いわゆる医局が配置されている研究棟においては、医局員の居室は明るくて広々としていて、素晴らしいです。研究室も自由にレイアウトしたスペースに、真新しい実験台をふんだんに配置できました。そこで、次にソフト面の充実をどのように進めるかということが課題です。実は大学にはたくさん引き出しがあり、大学でないとできないことが多いです。その辺りをうまく伝えていけたらと思います。骨髄移植、難病、アレルギーなどの拠点機能なども大学の特徴です。拠点に求められる機能は様々ですが、拠点としての充実度が高いのが大学の特徴です。

大学の魅力と言えば、研究は欠かせません。昨今、我が国の医学研究力の低下が著しいことが問題になっています。初期研修制度、専門医改革、働き方改革、いずれをとっても、研究の促進にはアゲインストとしか言えません。特に地方では深刻です。働き方改革で空いた時間に研究をしましょうと言っても、あまり現実感がありません。研究はやりたい人だけが自己研鑽でやるという風潮もある程度は仕方ないと考えていますが、できれば業務の一部として研究を行うことがスタンダードになる取り組みも重要ではないかと考えています。それこそが、大学の魅力の一つです。このような状況において、いかに研究を促進するかを、様々な立場の人々と相談しながら、推し進めたいと思っています。研究をしっかりと進める上で、基礎、保健学科と



臨床の更なる連携、他学部との連携が重要です。また、研究の推進は大学への更なる貢献に繋がります。

西江先生> ありがとうございます。

次の質問ですが、琉球大学病院と同様、医学部は2025年1月より西原町から宜野湾市へ移転し、新キャンパスとなりました。施設の特徴や機能、これまでとの違いをご紹介いただけますでしょうか。

中西先生> まず初めに、新キャンパスでは、広々とした空間に豊かな緑が広がり、それが東シナ海の景色と相まって、最高の景観となっています。

新キャンパスの最大の特徴は、臨床、基礎、保健学科がすべて一つの建物に集約されている点です。この新しい施設では、各学科間の連携がこれまで以上に強化され、学部運営・教育・研究の一体化が進むと考えています。実際、様々な講座や部署の先生方とのコミュニケーションが増えました。因みに私の担当する育成医学・小児科講座は研究棟の7階にありますが、お隣は医学科長をお務めの高槻教授がおられる消化器・腫瘍外科学講座で、何かあるとすぐに直接相談できてありがたいです。また、同じフロアに副医学部長をお務めの基礎看護学分野の豊里教授がおられ、あれこれ話がスムーズです。階は違いますが、副医学部長、医学教育企画室長などをお務めのウイルス学講座の大野教授のと

ころにも足繁く通っています。いつも頼み事ばかりしていますので、「中西が来るとろくなことがないな」と思われているかもしれません(笑)。その他の先生方とも簡単に行き来ができることはコミュニケーションの活性化に大いに貢献しています。

新キャンパスのもう一つの大きな特徴は、先端医学研究センターの建物が完成したことです。先端医学研究センターは2016年度に発足しましたが、これまでは建物はありませんでした。本センターの設立の趣旨は、医学部、医学研究科、および病院において行われる先端的研究を支えるために、専門的知識・技術を備えた人材を配置し、基礎・臨床の垣根を超えた研究支援体制を構築することです。ひいては、医療水準を向上させ、「沖縄健康医療拠点」に資することを目的としています。この目的達成のため、建物が完成したことにより、今後はさらなる研究の発展が期待されます。具体的には、沖縄の天然資源の利用と創薬、熱帯・亜熱帯環境下における感染症研究、住民ゲノムコホート及び疾患ゲノムコホートの構築、細胞治療研究及び幹細胞治療、医療データ管理システムの構築、産学連携及び知的財産管理体制の整備などに取り組んでいます。

移転によって、講義室や図書館の充実も図られました。大講義室では、固定された什器はなく、小さなテーブルを多数配置して、グループワークがしやすいようになっています。また、図書館では、個人の学習スペースとしての機能も充実しています。

西江先生> 大変よく分かりました。ありがとうございます。続きまして、琉球大学医学部における今後の方針と課題についてお聞かせいただけたらと思います。臨床教育、研究活動、人材育成についてお聞かせください。

中西先生> まず、臨床教育については、コアカリキュラム、コンピテンシーを意識して、それを達成できるように、きめ細やかに教育す



ることが重要だと考えています。

昨今わが国の医学部では、学生が質の高い医療従事者として成長するために、学問だけでなく、実践的なスキルを養うことを重視しています。その一環として、共用試験、具体的にはCBT、臨床実習前OSCE、臨床実習後OSCEが導入されており、これらの試験は、学生が医師としての責任を果たすために必要不可欠な知識と技術を身につけているかを確認するためのものです。

これらの試験は、単に学生の能力を測定するものではなく、医師としての倫理観、責任感、コミュニケーション能力、チームワーク能力なども含めて評価されます。また、これらの試験は卒業要件の一部として位置付けられており、合格することで次のステップに進むことができます。医学部のカリキュラムにおける共用試験は、学生が社会に出てから即戦力となるために必要なスキルと知識を確認する重要な場であり、実践的な能力を養うために欠かせないプロセスです。

琉球大学では令和5年度から文部科学省のポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業を担当しています。本事業は、大学医学部における養成課程の段階から医師の地域偏在及び診療科偏在や高度医療の浸透、地域構造の変化等の課題に対応するため、将来、地域医療に従事しようとする意思をもつ学生を選抜する枠を活用し、地域にとって必要な医療を提供することができる医師の養成に係る教育プログラムの開

発・実施を行う教育拠点を構築することを目的としています。

次に研究科活動について先にも述べたように、大学を特徴づける魅力の一つではありますが、琉球大学の現状は厳しいと言わざるをえません。本来研究ができることが大学の魅力なのに、研究が十分できない現状があります。そのような現状において、臨床に直結するような研究は実はそれほどハードルは高くないことを若い先生たちに告げています。研究をして論文を書くという本来なら楽しい行為を、是非やってみたいと思う人が増えて、大学に集まってくるのが理想です。そのようになるためには、私どもが地道に取り組むとともに、国や自治体の革新的な対策が必要だと考えています。できる人が申請して獲得するといった支援でなく、やりたくてもできない人がどのようにすればできるようになるかを皆様と共に考えていきたいと思っています。

最後に、人材育成についてですが、沖縄県で末長く活躍してくれる医療人材を増やすことが課題です。これは簡単ではありませんし、数年でできることではありませんが、様々な立場の人々とよく話をし、長い目で沖縄の医療を考える視点を共有する必要があると思っています。視野が狭いと言われるかもしれませんが、沖縄県の医療を考えると「沖縄県で末長く活躍してくれる医療人材」という視点は避けて通れません。沖縄県は医師過剰県であるにもかかわらず、様々なところで人材不足が発生しています。これは数字の出し方に問題があると考える一面もありますが、よく言われる地域偏在、診療科偏在は確かにあります。これらを解決する方策の一つは、大学に所属する医師の数を増やすことだと思います。それにより、人材の循環を円滑にして、県内の医療を隅々まで満たすことを目指すべきであると思っています。具体的には、地域枠学生の在り方、初期研修の在り方、専門研修の在り方など、あらゆることへの働きかけが必要です。琉球大学を卒業した医師が、どうすれば沖縄県に残って確実にキャリア形成を行

いつ、末長く沖縄の医療に貢献できるかを考える必要があります。ひいてはこのことが、研究力向上にも繋がり、沖縄県の医療レベルも向上させると思います。若い人材が適切に循環して、様々な経験を積みつつ、自らのキャリア形成と同時に社会にも貢献できる、そのような仕組みが重要です。もちろん、人材育成においては、数だけではなく、質も重要であり、少数精鋭という考え方もありますが、まずはある程度の数が必要で、それにより人材の循環が適切になされることによって質もある程度担保されると考えています。

その他の今後の課題としては、特に経済基盤の安定化が挙げられます。持続可能な成長を実現するために、資金調達が多角化と長期的な財政計画が不可欠です。皆様としっかり取り組んでいきたいと思っています。

西江先生> ありがとうございます。私も身の引き締まる思いがします。続きまして、私の立場から見ても容易に想像がつくんですけども、現在、医学部長と小児科の診療科長を兼任されており、大変お忙しくされているのではないのでしょうか？

中西先生> はい、確かに非常に忙しい日々を送っていますが、どちらも私にとって大変重要な役割です。医学部長として、教育や研究の進展を支える一方で、小児科診療科長としては、患者さんやその家族と直接関わることで医療現場の最前線を理解し、これを教育活動にフィードバックすることができます。この二つの役割がうまく連携することで、より質の高い教育と臨床活動が実現できると信じています。時間は短くても自身が現場にいることを大切にしています。少なくとも小児科で起きていることは隅々まで把握するように努めています。また、教育の観点から、現場での指導は、確実に実施できるようにしています。何よりも、私自身、臨床現場が好きですので、ある意味、気分の切り替えにもなっています。

西江先生> ありがとうございます。それでは、続きまして、中西先生の日頃の健康法や趣味など、ちょっと個人的なことをお伺いしたいのですがよろしいでしょうか？

中西先生> 日頃の健康法ですが、もっか運動不足が悩みの種です。以前はエレベーターを利用しないことが唯一の運動でしたが、最近はできていません。ランニング、水泳、ゴルフ、テニスなど、いずれも少々やりますが、どれもあまり得意ではありません。趣味は音楽です。聴くのも演奏も好きです。中学生の頃からドラムをしており、今も自宅にサイレントドラムがありますが、サイレントといってもアタック音や振動がありますので、集合住宅では苦情の種です。そのため、エアー演奏に近く、それはそれでちょっとストレスです。しかしながら、手足は結構動かすので、運動にはなっているかもしれせん。

西江先生> それでは、座右の銘についてもお聞かせいただければと思います。

中西先生> 座右の銘については、「随所に主となる」です。これは、臨済宗の宗祖臨済義玄禅師の言行録『臨済録』に、「随处作主、立処皆真（随处に主となれば、立処皆な真なり）」という一節があり、そこから来ています。それぞれの置かれた立場や環境で、それぞれのなすべき務めを精一杯果たせば、必ず真価を発揮す

ることができるかと理解しています。

実のところこの言葉を座右の銘としたのは、2000年に和歌山に赴任した時からです。それまでは米国クリーブランドにおり、研究も順調で家族も一緒に本当に楽しい毎日を送っていました。しばらく日本に帰るつもりもなく、帰るとすれば母校の神戸大学に帰りたいと考えていましたが、突然和歌山に赴任することになりました。その時に、これは心を強く持つために何かしらの支えが必要だと感じていた時に会ったのがこの言葉です。このことが、沖縄に赴任するにあたって役立ったと思います。

私自身、キャリア形成という意味では、積極的にこうなりたいとかああなりたいと考えてはいませんでした。キャリアデザインなどという言葉は聞きますが、自分には無縁だと思っていたところ、最近、それには2つのパターンがあるということを知りました。一つは、「川下り型キャリア」というらしいです。これは仕事を始めたばかりの頃のキャリア形成の考え方で、仕事に慣れておらず、全体像が見えていない時期のため、周囲の影響を受けざるを得ない状況だそうです。このような場合では、ゴールを掲げて進むよりも「目の前のことを1つ1つ乗り越えて経験を積み上げていく」というキャリア形成の意識が重要とのこと。仕事や周囲の関係といった急流にもまれながら進むことから、川下り型キャリアと呼ばれ、緻密な計画をたてるよりも、経験後の振り返りと挑戦し続ける姿勢がポイント、意欲的に能力向上へ取り組



むことが重要だそうです。一方、「山登り型キャリア」というのがあり、通常キャリアと言えばこちらをイメージするのかもしれませんが。こちらは、一定のキャリアを積んだうえで、さらに次のステップへ挑戦しようとする際のキャリア形成の考え方で、目標にする姿とプランを明確にし、目標に向かって一步步つ着実に積み上げていく様子から山登り型キャリアと呼ばれるそうです。大切なのは、「自分の意思でプロを目指す領域を決める」ことで、自分の価値観や仕事の動機をもとに、覚悟を固めてキャリアを形成するというものです。自分は完全に「川下り型」だと思います。「自分の意思でプロを目指す領域を決める」という意識が決定的に欠かしていません。因みに私が腎臓病の専門になったのはどうしてかと聞かれると「神の見えざる手」によりますと答えています。それで、今では日本小児腎臓病学会の理事長を務めています。私は人というものは求められるところで力を発揮するべきだと常々考えています。近頃、自分の意思で何でも決めることが善というような風潮があります。けれど考えてみてください。皆がそのようなことをしたら世の中が回りません。医療でいうと、これが医師の偏在や地域医療の崩壊に関係しているのかもしれません。

西江先生> 大変よく分かりました。私も同じように何となくの流れでこういう風になってきたのかなと感じるところはありますね。

最後に沖縄県医師会に対してのご意見・ご要望がございましたらお聞かせください。

中西先生> これまで沖縄県医師会の皆様には、会長の田名先生をはじめ、多大なご支援をいただいております。今後も医療現場の声をしっかりと反映させていただければと思います。また、産業界や行政との連携を強化し、地域医療の課題に対応するためには、より我々と医師会の皆様との協力が必要です。医師会の皆様には引き続き、ご支援、ご指導を賜りたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。



P R O F I L E

略歴

- 1989年 3月 神戸大学医学部 卒業
- 1989年 6月 神戸大学医学部小児科入局
(2000年9月まで)
- 1998年 4月 ケースウエスタンリザーブ大学小児科
博士研究員(2000年9月まで)
- 2000年10月 和歌山県立医科大学小児科入局
(2017年1月まで)
- 2016年 3月 同 准教授
- 2017年 2月 琉球大学大学院医学研究科育成医学
(小児科) 教授
- 2018年 4月 遺伝カウンセリング室長併任
(2025年3月まで)
- 2019年 4月 副病院長(診療、臨床研究担当) 併任
(2023年3月まで)
- 2020年 7月 日本小児腎臓病学会理事長(現職)
- 2023年 4月 副病院長(医療安全担当) 併任
(2025年3月まで)
- 2025年 4月 医学部長・医学研究科長併任

資格

- 日本小児科学会専門医・指導医
- 日本腎臓学会(小児)専門医・指導医

所属学会

- 日本小児科学会・理事
- 日本腎臓学会・理事
- 日本小児腎臓病学会・理事長
- 日本小児腎不全学会・評議員
- 沖縄小児科学会・会長
- International Society of Nephrology
- The American Society of Nephrology
- International Pediatric Nephrology Association・
Executive Committee Member など

西江先生> 本日は長い時間本当にありがとうございました。お話を伺って大変参考になりました。

今後ともぜひよろしくお願ひします。

インタビューアー：広報委員 西江 昭弘